

猿新聞

編集責任者
山村 準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：100部
赤目地区：150部
箕曲地区：70部
ひなち地区：220部
つつじが丘：430部
【全戸配布】
国津地区：380部
市民センター：90部
(9地区)
名張市議会：20部
名張市役所：30部

地球の昆虫種 41%危機に直面

アカトンボ (アキアカネ) が大集団で田んぼの周辺を飛び交う風景は秋の風物詩となっていました。

しかし近年、このアカトンボが減少している。都道府県によってはレッドリストに記載され、絶滅も危惧されています。また、最近カブトムシを飼育するたなあと、思うのは私だけでしょうか。一体何が原因なのでしょう。

まず、農薬との因果関係が考えられ、1990年代から普及してきた稲の育苗時に用いられる殺虫剤の影響が大きいと考えられています。全ての昆虫を人間の身勝手な益か害かという区分けをして、「害虫」、有益なものは「益虫」と呼ばれています。アカトンボは「益虫」に区分されています。

農業は害虫だけに効くわけではなく、益虫であっても容赦なく殺してしまいますので、害虫・益虫ともに減少しつつあります。他にも減少した原因として、水田の中干しなど、耕作方法の変化が指摘されています。また、気候変動もその理由とされています。

今、世界中に生息する昆虫の40%が「劇的な減少率」で個体数を減らしていることが、最新の研究で明らかになっています。

昆虫は地球上に棲む生物の大半を占めており、人類を含む動植物に重要な恩恵をもたらしている生態系を正常に機能させるために必須のものなのです。昆虫はまた、鳥、魚、そして他の動物にとっても重要な食糧源であり、昆虫がいなくなれば、それらの動物も減少してしまいます。加えて昆虫は、穀物の受粉を助け、土を作り、害虫の数を抑制したりしています。昆虫の減少は今、世

界中ほぼ全ての地域で起きており、向こう数十年で全体の40%が絶滅する恐れがあるといわれています。昆虫たちの損失を止めなければ、「地球全体の生態系や、人類の生存にまで壊滅的な結果をもたらすことになるでしょう」と科学者達は警鐘を鳴らします。

過去の大量絶滅は氷河期の到来や隕石の衝突が原因と考えられているが、しかし、今回の大量絶滅は人間の活動が原因で起こっているのです。つまり森林破壊、資源採掘、地球温暖化を促進する二酸化炭素の排出などです。

一世紀先には地球上から昆虫がいなくなるかもしれないとまでいわれています。

皆さん、農業は人間の力だけでやれると考えていませんか？ だとしたら、もう一度よく考えてみましょう。

農業で食糧を作るには様々な生き物の虫や動物の力を借りなくてはならないのです。野生のハチ、チョウなどが作物の受粉を手伝ってくれなければ、世界は必ず食料不足になってしまうでしょう。

特に受粉作業を担うミツバチがいなくなる人がやらなければなりません。日本では農業従事者の高齢化や労働力不足の中、また、新たな受粉問題という大きな課題を抱え込むことになるでしょう。

植物、動物、昆虫、微生物とさまざまな生き物が生まれ、生きていくには水、空気、土、太陽が必要です。これら4つのもとの生き物が関係しあって作られている仕組みを自然生態系といいます。

中国、毛沢東時代の1958年、「四害駆除運動」が実施されています。四害駆除とは、蚊、ハエ、ネズミ、そしてスズメの駆除のことを指します。スズメが「害鳥」として数万羽の駆除が実施されています。1960年になると天敵が(スズメ)いなくなったがためにイナゴが大量発生し、作物を全て食い荒らし、2000万人が死亡するという大飢饉が発生しています。自然生態系のバランスが大きく崩れたということです。その自然生態系の回復

には多数の年月を要したといわれています。

このような愚かなことが、日本始め世界各国で行われているということ、歴史を通じて再認識する必要があります。

昆虫には直接毒性のない農薬である除草剤が、水草の減少を介してトンボを始めとする水性昆虫に与える影響が大きいということが最近の研究で明らかになっています。

山村に広がる水田は、人の手が加わることで、周辺の山地や雑木林と一体となって里山・里地を構成し、多種多様な生きものを育んできた二次的自然です。

今や、その自然は深刻な危機にさらされています。

農業の近代化、合理化は、コメの生産性を向上させる一方、多くの昆虫類などが水田から姿を消したように、今後、陸域で起きるであろう生物多様性の損失の70%は、農業関連の要因によると予測されています。

日本では過去50年間に、土の水路や土手に

物が生きられる水田の環境が大きく失われてきました。

近代化された農業は、化石燃料への急速な依存拡大と並んで、生物多様性を損なう人間活動の代表として挙げられています。

二次的自然である水田生態系は、農業という人の営みがあることで成立し、維持されてきました。人の影響を排除すれば生物が戻ってくるという単純な関係ではなく、水田が放棄されるなどして人の手が加わらなくなると、生き物が難しくなる生きものもいます。水田の生きものを守るためには、農業と自然との両立が不可欠なのです。

壊した自然は元にもどりません。自然生態系は、長い年月をかけてつくられてきた仕組みで、生きものだけでなく、40億年という長い時間をかけて今の姿になったのです。だから自然を一度壊してしまつと、元に戻すのは難しいのです。水、空気、土、太陽は、地球に生きるみんなのものだから、大切にしましょう。水や空気をよごしたりせず、むやみに生きものをいじめないこと、これが地球という大きな生態系の約束ごとなのです。

先日、農作業場ヘトラクターを点検にいったときの出来事です。エンジンルームの下にオイルが大量にこぼれ溜まっています。「エンジンコッチャ」と、慌ててボンネットを開けると大きなネズミが飛び出してきてエンジンルームの中にはビニールや藁などで大きな巣がつくられていて、燃料パイプなどが齧られていました。被害額は5万円超。

小動物がエンジンルームのなかに入り込む事は、近年増えていきます。気付かずにつかつかリエンジンをかけたら思わぬ大惨事になりかねません。

どのような対策があるのか考えてみましょう。人気の少ない場所に駐車した車のエンジンルームは、ネズミたち

小動物にとって居心地が良い空間で、狭く入り組んでいて外敵から身を隠しやすい、雨風もしのげ、安心して過ごすことができる場所なのです。寒い日に暖を取りに来ることもあり、暑い日の日差しを避けるために潜ることもあります。

ちなみに、エンジンルームに潜り込みやすい動物は、猫やヘビ、ネズミですが、なかには鳥が巣を作っていたという事例もあります。

では、どこからどうやって、動物たちはエンジンルームに入り込むのでしょうか？

トラクターやクルマの下からエンジン回りを見上げると、サスペンションやエンジン、など、車のパーツが密集してかなり狭いですが、子猫や小動物



トラクターやクルマを ネズミから守る

は、その狭い場所を好み僅かの隙間があれば侵入します。狭い場所を好むという

観点から、私はこれからは対策として、トラクターのボンネットを開けておこうと思っています。

対策として最も手軽に出来るのはボンネットを叩くこと。通称「猫パンバン」。これは自動車メーカーも推奨しているやり方です。ただし、強く叩きすぎると逆効果。余計に奥に入り込んでしまう可能性があります。あくまでも動物に「知らせる」イメージで、やさしく叩くこと大事です。また、クルマではクラクションを鳴らす。ドアを強めに閉めるというのも効果があります。これらは簡単にできるもので試してみてください。

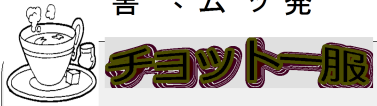
その他にも木酢液、コーヒーの出がらし、漂白剤、クレゾールなどをトラクターやクルマの周りに散布するという方法もあります。ただし、これらの方法は一時期には来なくなつても、その匂いがなくなるまでまたやってきますので、こまめに交換を行う必要があります。

ここ数年、車の動物侵入対策で注目されているのが、超音波発生

器です。この超音波発生器が有効な理由は、人間にはない動物の身体をつくりにあります。たとえば猫の場合、人間が14キヘルツ〜20キヘルツ程度の音までしか聞き取れないのに対して、猫は100キヘルツ程度の周波数まで聞こえます。つまり、20キ〜100キヘルツの音は、人間が聞き取れず、猫は聞き取ることができるといえます。その高さの周波数の音（超音波）を大きな音で流すことで、嫌がって近づかないようにするのが、この超音波発生器なのです。ただし機種によっては、耳が良いと聞こえてしまう人もいます。周波数の下限が18キヘルツの場合、モスキート音と呼ばれる音が聞こえることがあります。せっかくなので、モスキート音が聞こえるようでしたら、人間にも影響がありますので、購入時は周波数に注意してください。

少し値段が高めの超音波発生器を購入すれば、高い周波数帯の音を発生させることができますので、検討してみましよう。

ちなみに、超音波発生器を使用するメリットは、エンジンルームの侵入対策だけでなく、自宅の庭への侵入被害も防げます。



神の使いの動物たち

動物を神の使いとする考え方は自然崇拝の名残です。かつて、人は動物の行動や習性からさまざまなことを学び予知していました。

たとえばウミガメが陸に近い場所に産卵する年には大きな台風がくるとか。鼠が家から逃げると地震や火事が起こるとかです。鯨と地震の関係はさておき、狐が鳴くと不吉なことが起こる前兆だ、など迷信に近いものもありますが、それも、いかに人々が動物の動向に注意を払い、細かく観察していたかということです。裏を返せば、これは「人間は自然の一部として存在する」ということを認識していたということであり、「人智に対して我々はいかに謙虚であったか」ということのあらわれでした。

たとえばモンゴルではミミズも神です。草原の民にとって土壌を豊にしてくれる動物は自然

界における「神」なのです。科学万能の時代に至り、ゲノム解読の結果、なんと人の遠い祖先はナメクジウオだったという研究結果が発表されたのはつい最近のことです。

日本の多くの神社の入口脇に置かれている狛犬は、その神社に祀られている神さまの使いであります。

狐は、穀物・農業の神である稲荷神の使いとされています。稲荷神と狐の結びつきがあまりにも強いので、神社の境内にいる狐たちもお稲荷さんと呼ばれるようになりました。

牛は鈍感そうで、あまり賢くないと思われる方もいるかもしれませんが、実は知能が高く、日本では学問の神である天神さまと結びつけられているほど。

また、サルは家族の幸福のシンボルとして崇められています。寺や神社にお参りすれば何世代にもわたっての日本人に親しまれながら崇められてきた動物たちに会えることができます。

たの多い集落は次第に避けるようになります。サルの被害が他の獣類の場合と大きく異なる点に、優れた四肢を持つ点が挙げられます。人と同様に物をつかむことのできる両手に加えて、足でも物をつかむことができます。これが大きな要因といえます。

彼らは、他の動物と比べて人間に近い感情をもっていると考えられています。表現が豊か

で、特に目の前の対象に対する好き嫌いの感情は表情だけでわかってしまうほどです。さらに自分の感情に素直なため、理性で抑えることはありません。そのため個体によってかなり攻撃的なこともあり、野生下のも

にはむやみに近づかないほうが賢明です。鋭い犬歯があるので、もし噛まれてしまうと大怪我をする恐れがあります。その一方で、猿回しなどのショーに登場するニホンザルは、とても従順です。飼いがボスであることを認識すれば、よほどのことがない限り逆らうことはありません。



サル出没状況

古川 高志

A群の行動について
A群は、主に比奈知ダムと青蓮寺ダムを交互に行動しています。今の時期、食べ物が少ないためそれぞれのダムでの比較的餌の多いところの特定の場所に集

中し滞在期間は短くなっています。比奈知ダムと青蓮寺ダムを行き来の中で、つつじが丘団地が狙われています。私たちが行動を監視しながら団地内への侵入防止対策を強化し阻止に動いています。その関係か、サルも目先を変えてしばらく行かなかつた神屋・奈垣方面に行くようになってきました。

12月25日は青蓮寺湖の上流の流木防止フェンスを渡るのが確認されています。12月29日は奈垣下口に、1月2日は比奈知湖上流の天王大橋付近で13頭目視。1月5日には下比奈知鎌江集落に、1月6日にはつつじが丘から青蓮寺ダムに行く三叉路付近という感じの遊動を繰り返しています。今回はB群の情報は入ってきません。

サルを知ろう②

有害鳥獣の被害を防ぐには、まず被害を及ぼす動物の生態や特徴を知ることが最も重要なこととなります。被害対策を講じてもかかわらず農業被害・生活環境被害が発生しているのは、その対策のどこかに根本的な誤りがあったという証しにほかなりません。

日本では北海道を除く本州や四国、九州と幅広く分布している日本人にとっては身近な動物です。北限は下北半島です。体つきはがっしりとしていて、オスの体長は50〜60センチ、メスは45〜55センチほどです。ピンク色の肌が毛色と比較してよく目立ちます。この顔の色は年齢を重ねるにつれて赤みを増していくようです。昼行性で、基本的には群れをつくって行動し

動し、夜間は活動しません。群れによる集団で行動し、群れはメスと子どもを中心に構成されています。オスは大人になると群れを離れて単独で行動したり、他の群れに移ったりします。いわゆるハナレザルです。これは近親相姦を避けるための本能的行動といわれています。ハナレザルは、時として山から10キロ離れた市街地に突如として現れることがあります。大抵は一過性で、そこにエサとなる物がなければ自然と山に帰って行きますが、容易に餌が手に入られる環境であれば居着いてしまします。たつた一匹ならと、気を許しているとき、そのうち群れを引き連れて大

勢やって来るかも知れません。そうなる前に早めに追い払ってしまいましよう。サルは高い学習能力を持ち、集落内が安全で餌が豊富にあると認識すると山に戻らなくなってしまう。交尾期は年一回で秋から冬、出産期は春から夏です。2〜3年に1頭の割合で出産しますが、農作物に依存して餌が豊富にあると年1頭ずつ産みます。寿命は25年ほど。飼育下では37年生きたという記録もあります。

街や集落から餌となるようなものを無くすることが最も重要なことです。サルの唯一の天敵は人間です。侵入したところを脅かされるなど、怖い目にあうこと